

近世における禅宗行法書の出版について

——施餓鬼・観音懺法を中心に——

徳野 崇行

一 はじめに

二〇〇〇年以降、施餓鬼法に関する書籍の刊行が続いている。「真言行者必携の書」と紹介される新開真堂編著『施餓鬼法広述』（青山社、二〇〇四）は「講伝篇」「作法篇」の二篇からなり、東寺長者二五一世の松永昇道による『施餓鬼法口決』と、真常和上による施餓鬼儀軌二点の本文訓読・解説・註解を載録し、「日々の自行に最適」な真言宗の施餓鬼法を記す。禅宗では臨済宗と曹洞宗のいずれにおいても出版物がみられる。野口善敬編著の『開甘露門の世界——お盆と彼岸の供養』（禅文化研究所、二〇〇八）は臨済宗の「開甘露門」という施餓鬼法の起源を『幻住庵清規』の「開甘露門」や、『大正蔵』所収の実叉難陀じつしやなんだと不空の訳出經典に求め、それらの經典・儀軌の訳注を丹念に行った書である。曹洞宗の施餓鬼法を論じているのは、竹林史博の『施餓鬼 仏教と生活2』（青山社、二〇一三）であり、孟蘭盆や施餓鬼に関わる民俗資料の報告を蒐集し、近世から近代における施餓鬼を巡る見解や論争をまとめ、諸宗派の施餓鬼法を紹介している。これらの書籍の刊行は、真言・臨済・曹洞といった宗派を問わず施餓鬼法が現代においてもなお僧侶が関心を向ける重要な儀礼であることを示している。

このような施餓鬼への関心は、近年、宗教学という学問分野においてもみられる。その中で「施餓鬼」を巡って研究を精力的に進める代表的な論者は池上良正である。池上は東アジアにおける死者救済のシステムとして「身内の死者への孝養」と「苦しむ死者の救済」とが有機的・動態的に結びついて形成されたという視点を提示し、その「苦しむ死者の救済」を最も典型的に体现した行事として「施餓鬼」を捉えている。

本稿は、こうした諸研究を念頭に置きつつ、近世に出版された仏教の行法書を通して、近世禅宗の供養儀礼を考察す

るものである。近世に隆盛を極める木版印刷によって知識や物語など様々な情報が流布するようになったことは、周知の通りである。近世に刊行された書籍の中には仏教書が数多く含まれ、禅宗では祖録のほか、禅林での行法を体系的に示した清規しんぎや単一の儀礼を詳説した行法書などが刊行された。

本稿ではまず、葬送儀礼の行法書とともに施餓鬼や観音懺法などの行法書が出版された状況を確認し、次いで『施餓鬼鈔』や『懺法之起』『円通懺儀鈔』を手がかりとして行法書の由来の語りや行法について考察する。その中で、中国撰述の如々居士の「施食文」に示された施餓鬼法について取り上げつつ、供養儀礼としての施餓鬼や観音懺法の分析を通して、近世禅宗における死者供養の世界を描いていきたい。⁴⁾

二 近世に刊行された施餓鬼や懺法に関する典籍の状況

まず近世に刊行された施餓鬼や懺法に関する典籍の状況を確認したい。表1は近世に刊行された葬送儀礼の手引書、施餓鬼や懺法に関する行法書をまとめたものである。

表1 近世に刊行された仏教諸宗派の行法書一覧

※『国書総目録』『仏書解説大辞典』、駒澤大学図書館編『新編禅宗目録』、慶應義塾大学斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』第一巻〜第三巻、『曹洞宗文化財調査目録解題集』を参照した。検索には「施餓鬼・施食・大施餓鬼・大施食・甘露・水陸・盆・無縁・円通・観音懺法・懺法・懺摩・慈悲・水懺」などの語を用いた。

刊行年	書名	撰者・編者 ()内は目録内の分類を示す	書肆
一六二四(寛永元年)	『禅林引導集』(別名・禅林諸祖弔霊語藪) 一〇冊	湖隠鑑編	吉田三郎兵衛・栗山伊右衛門(京都)(後刷・柳軒)
一六三八(寛永一五年)	『懺法因起』一冊		
一六三八(寛永一五年)	『浄土無縁集』一冊	【浄土宗系統】	
一六四八(正保五年)	『観音懺法註』一冊		戒光院
一六五六(明暦二年)	『慈悲甘露三昧水懺』三冊		
一六五九(万治二年)	『無縁雙紙』一冊	【禅宗】	

一六六〇(万治三年)	『無縁慈悲集』二冊	報嘗編【浄土宗系統】	山口市郎兵衛(京都)
一六六〇(万治三年)	『円通懺儀鈔』一冊		林伝左衛門(京都)
一六六三(寛文三年)	『観音懺法註并起』一冊 (『円通懺儀鈔』の改刻)		小川多左衛門(京都)
一六六三(寛文三年)	『施餓鬼鈔』一冊	【曹洞宗力】	村上平楽寺(京都)
一六六三(寛文三年)	『懺法之起』一冊(『円通懺儀鈔』の改刻)		村上平楽寺(京都)
*一六六六(寛文六年)頃・目録	『施餓鬼經』一卷	【経部】	
*一六六六(寛文六年)頃・目録	『施餓鬼注』一冊	生堂(禅宗)	
一六六七(寛文七年)	『増補分類 無縁雙紙』四冊	【禅宗】	小川多左衛門(京都)
一六七〇(寛文一〇)	『慈悲水懺法』三冊 (別名・支那撰述慈悲水懺)	唐・知玄(悟達国師)	田原道住(京都)
一六七七(延宝五年)	『施餓鬼作法』一帖 (別名・真言宗施餓鬼作法)	浄厳【真言】	
一六八〇(延宝八年)	『大施餓鬼集類分解』一冊	原古志檉撰【臨濟宗】	田原仁左衛門(京都)
(一四五九(長禄三年)序)	『請観音三昧儀註解』二冊 (外題・懺法註解)	道雲石佛述	石田茂兵衛
一六八二(天和二年)	『小施餓鬼集』三冊		
一六八三(天和三年)	『施食要訣』一冊	独湛性笠輯【黄檗宗】	林五郎兵衛
*一六八三(天和三年)目録	『施餓鬼科註』四冊	亮汰(仏書)	
*一六八三(天和三年)目録	『施餓鬼新鈔』二冊	(仏書)	
*一六八五(貞享二年)目録	『施餓鬼修要』一冊	(天台)	
*一六八五(貞享二年)目録	『施餓鬼科』一冊	【禅宗】	
一六九〇(元禄三年)	『孟蘭盆献供儀』一卷	戒山慧堅編【真言律宗】	梅村彌白(京都)
一六九一(元禄四年)	『施食通覽』二冊	宋・宗曉編、戒山慧堅開版【真言宗】	藤井佐兵衛(京都)
*一六九二(元禄五年)目録	『施餓鬼纂解』二冊	西往寺(禅宗)	
一六九三(元禄六年)	『施餓鬼儀釈要』一冊	性亮	
一六九八(元禄一一年)	『浄土諸廻向宝鑑』五冊	必夢撰【浄土宗】	永田調兵衛(京都)
一六九九(元禄一二年)	『施餓鬼法訣並真偽辨』一卷	浄厳【真言】	

*一七〇九（宝永六年）目録	『施餓鬼私考』一冊	元法（仏書）	
*一七〇九（宝永六年）目録	『盆供私記』一冊	妙幢	
一七一一（正徳三年）	『浄土無縁引導集』六冊	松蒼徹的【浄土宗系統】	
一七一一（正徳五年）	『慈悲水懺法備檢』三冊	大拙元鍊輯【黄檗宗】 （博桑榮林後学沙門元鍊大拙輯）	版鑲於武陵瑞聖禪寺
一七二七（享保二年）	『施餓鬼作法』一冊	面山瑞方撰【曹洞宗】	竹清
一七五五（宝暦五年）	『重観 観音懺摩法』一冊	面山瑞方校【曹洞宗】	林伝左衛門（京都）
一七六五（明和二年）	『盆供施餓鬼問弁』一冊	尾州人事山興正寺の諸忍【真言宗】	山城屋佐兵衛（京都）
*一七七二（明和九年）目録	『観音懺法 大乘寺章付小刻』一卷		
一八二六（文政九年）	『盆供養正説』一冊	一心山藏板	
一八二七（文政一〇年）	『施食盆供辨誤』一冊 （内題「施餓鬼儀軌并辨誤」）	縁山僧某志（増上寺）【浄土宗】	
一八四六（弘化三年）	『施餓鬼并念誦』折本一帖 （「若人欲了知」に始まる施食文）		

葬送儀礼の典籍は寛永元年（一六二四）刊の『禅林引導集』にはじまり、表1にあげた『浄土無縁集』『無縁雙紙』『無縁慈悲集』『増補分類 無縁雙紙』『浄土諸廻向宝鑑』『浄土無縁引導集』など計七点が確認できる。施餓鬼に関する典籍の早い例は寛文三年（一六六三）刊の『施餓鬼鈔』で、それ以降実に計二三点を数える。懺法に関する典籍は寛永一五年（一六三八）刊の『懺法因起』からと考えられ、計一点ある。表1が示すように、葬送儀礼の手引書だけでなく、^⑤施餓鬼会や懺法といったある特定の法会の行法に特化した書籍が数多く刊行されている状況が見て取れる。

ではこうした施餓鬼や懺法が単独の行法書として編纂された背景について論じてみたい。中世、戦国期の追善仏事として営まれた両法会は、近世前期の寺檀制度形成期において、主要な追善供養法となっており、葬送儀礼や追善仏事と担う菩提寺の僧侶には必須の儀礼であったようである。

例えば、近世において施餓鬼会が禅家の行法として確固たる地位を確立していたことは、真言宗の学匠として知られる浄厳^{じょうげん}（一六三九—一七〇二）の『諸儀軌訣影』からうかがえる。本書は元禄六年（一六九三）五月八日から翌七年（一六九四）の五月一六日にかけて開催された一九三会座の講伝の義録であり、参会した僧は二〇〇人から三〇〇人に

達していたという⁶。淨嚴は『施諸餓鬼飲食及水法并手印』の講義の中で、五如来名号や幡、大宝楼閣の陀羅尼をめぐって禅宗批判をしているものの、「今ハ施餓鬼ノ法ハ大方禪家ニ移ル様ニナル。」と記述している。多くの学僧の前でこのような発言がなされたということは、禅宗の施餓鬼が主流であるとの認識が真言僧にひろくみられたことを意味しているといえるだろう。

それに対し、懺法についていえば、宮増親賢の『新九郎流小鼓習事伝書』において、「せんぼうのおこりハぜんけのとむらひニせんぼうをしてとむらひ候事有」という記述がみられ、懺法もまた禪家の弔いとしての性格をもっていたことが知られる。

近世文芸、とくに怪談・奇談に多くの話材を提供した鈴木正三の片仮名本『因果物語』では、怨霊を得脱させる靈験あらたかな技法として禅僧の様々な行法が描かれているが、その中で特に多く登場するのは、施餓鬼と観音懺法である¹³。施餓鬼は上巻一の第二話、上巻三の第三話、下巻二の第一話に、観音懺法は上巻一の第一話と第三話、下巻十五の第二話に登場しており、これら二つの儀礼が十七世紀の死者供養の重要な行法であったことが見て取れる。例えば上巻一の第三話「夢中ニ吊ヲ頼事」では、禅宗と懺法との密接な関係が描かれている。こうした物語の世界だけでなく、施餓鬼や観音懺法が禅宗寺院の追善仏事として営まれていたことは、加賀大乘寺『副寺寮日鑑』の示すところである¹⁴。加賀藩の筆頭家老本多家の菩提寺である曹洞宗大乘寺では「檀中諸法事」として齋銀によつて十二段階に格式を定め、「二枚」「三枚」の格では施餓鬼が、「五枚」以上の格では観音懺法が年忌仏事に含まれている¹⁵。このように施餓鬼や観音懺法が禅宗の主要な供養儀礼となっていた状況は、その式次第や由来といった内容を記した行法書への受容を育む基盤となっていたことは想像に難くない。施餓鬼や観音懺法の解説を求める受容と、出版文化による供給とが結びつき、儀礼のもつ意味付けが流布し、均一化していく時代が近世と考えられる。

三 『大施餓鬼集類分解』と『施餓鬼鈔』

まず施餓鬼に関する行法書について見ていく中で、等持寺や相国寺に住した臨濟宗の原古志檜によつて撰述された『大施餓鬼集類分解』(以下、『分解』と略称する)について触れたい。本書は禅僧によつて編まれた日本初の本格的な施餓鬼に関する解説書といつてよいもので、本書を翻刻・詳説した『江湖叢書 大施餓鬼集類分解』では「日本禅宗史上、

もつとも古い施餓鬼の解説書」と評されている¹⁷。上梓されたのは延宝八年（一六八〇）であるが、成立は長祿三年（一四五九）となる。

この『分解』では中国で撰述された数多くの施餓鬼に関する文献が引用されている。とりわけ、隋代から南宋までの典籍を収めた石芝宗曉編『施食通覽』（二二〇四序）を多く引用する傾向が認められる。この『施食通覽』に収められていない如々居士（？—一二二二）の「施食文」や、鄭思肖^{ていしやう}（一二四一—一三二八）の『施食心法』（失伝）からの引用も認められる¹⁸。

近世に出版された施餓鬼の行法書の多くは、『分解』に限らず、『施食通覽』などの中国の施餓鬼法の典籍を参照しつつ、式次第や個々の陀羅尼の意味を記述している。そしてどの典籍を引用して記述するかによって、他の行法書との差異化を図り、その特色を出そうとする傾向が認められる。こうした傾向を把握するため、『分解』が引用している文献を中心に中国撰述の施餓鬼典籍をまとめたものが表2となる（以下〇囲い数字は、表2「中国撰述の施餓鬼に関する典籍一覧」のものを示す）。

一方、『分解』に先立ち、寛文三年（二六六三）に『施餓鬼鈔』という行法書が村上平樂寺より開板されている¹⁹。本書の内容は次の通りである。巻頭に『孟蘭盆経』全文を載録し、次いで¹⁸楊鏐『大陸大齋靈跡記』によって梁の武帝に始まる水陸会・施餓鬼の縁起を説く。そして²⁰鄭思肖『施食心法』にて「水陸」二字の字義を説明し、²¹長蘆宗蹟『水陸縁起』によって水陸会の由縁を説く。そして「或抄云」という書き出しで『分解』の序文を記し、²²慈雲遵式『施食法』を引用し、施餓鬼の利益を説く。『夷堅志』や『施食大要』などの典籍を用いて施餓鬼に臨む心構えを述べる。その後、破地獄偈に始まり七如来名号・往生呪を含む行法を示し、巻末に曹洞禅僧の真歇清了（二〇八八—一一五一）作の楞嚴会回向偈を解説する。

先に述べた『分解』と『施餓鬼鈔』とを比較してみると、『分解』は施餓鬼に関する典籍だけでなく、『阿含経』『涅槃経』などの經典、『大智度論』といった註釈書、『論語』『礼記』といった儒教典籍までも引用して詳説する形式であるのに対し、『施餓鬼鈔』は中国撰述の施餓鬼典籍のみに基づいて施餓鬼法を解説している。構成や引用箇所は『分解』のそれとほぼ共通するものであるものの、引用典籍を明記する本書にあつて『分解』のみを「或抄」と曖昧に表現しているのは、おそらく『分解』を強く意識しているためであろう。また『分解』に引用されていない²³長蘆宗蹟の『水

陸縁起』を引用している点は、『分解』にはない独自色を出そうとしている印象を受ける。

広く典籍全体の内容の違いに目を向ければ、『施餓鬼鈔』の巻頭には『孟蘭盆經』全文が掲載され、巻末には楞嚴會回向偈が付載されている。この偈は禪林における夏制中の楞嚴會に用いるものである。本書ではわざわざ回向文の題に割注を付けて「此ノ偈者曹洞下真歇了禪師ノ製ナリ」と記してあり、不空や遵式には尊称を付けていない選者が真歇清了にだけ「禪師」という尊称を付けている点を鑑みると、曹洞宗寄りの行法書であったといえるだろう。

このように『施餓鬼鈔』は『分解』刊行以前に、『施食要覽』などの中国の施餓鬼に関わる典籍を渉猟し、近世の出版文化を通じていち早く禪家、とくに曹洞宗に施餓鬼法に関する知見を流布する役割を果たした行法書と位置づけることができるだろう。

表2 中国撰述の施餓鬼に関する典籍一覧

番号	書名	選者	出典	行法
①	『受食呪願偈』三章	南嶽慧思 (五一五—五七七)	『統藏經』一〇一冊 (『施食通覽』所収)	×
②	『觀心食法』	智顛 (五三八—五九七)	『統藏經』一〇一冊 (『施食通覽』所収)	×
③	『出生因記』	孤山智圓 (九七六—一〇三三)	『統藏經』一〇一冊 (『施食通覽』所収)	×
④	『仏説救拔痲口陀羅尼經序』	遵式 (九六〇—一〇三三)	『統藏經』一〇一冊 (『施食通覽』所収)	×
⑤	『施食正名』	遵式 (九六〇—一〇三三)	『統藏經』一〇一冊 (『施食通覽』所収)	×
⑥	『施食法』	遵式 (九六〇—一〇三三)	『統藏經』一〇一冊 (『施食通覽』所収)	×
⑦	『施食文』	遵式 (九六〇—一〇三三)	『統藏經』一〇一冊 (『施食通覽』所収)	×
⑧	『施食法式』	遵式 (九六〇—一〇三三)	『統藏經』一〇一冊 (『施食通覽』所収)	↓差定↓攝依三章↓臨無大悲觀世音菩薩↓淨食加持偈 ↓加持飲食陀羅尼↓四如来↓生飯偈↓普回向
⑨	『施食觀想』	遵式 (九六〇—一〇三三)	『統藏經』一〇一冊 (『施食通覽』所収)	×

⑭	『修水陸葬枯骨疏』	蘓軾 (一〇三六—一一〇一)	『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×
⑮	『施食放生文』	陳舜俞 (北宋)	『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×
⑯	『崔学士施食感驗（目錄では「崔伯易施食感驗」）』	洪邁 (一一三—一一〇二) 『夷堅志』 に出る	『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×
⑰	『士大夫施食文』	史浩 (一一〇六—一一九四)	『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×
⑱	『初入堂叙建水陸意』	楊鏜の『水陸儀』に出る	『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×
⑲	『水陸大齋靈跡記』	楊鏜	『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×
⑳	『宣白召請上堂八位聖衆』	楊鏜の『水陸儀』に出る	『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×
㉑	『水陸齋儀文後序』	楊鏜	『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×
㉒	『水陸縁起』	長蘆宗頤 (不詳)	『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×
㉓	『斛前召請啓白文』		『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×
㉔	『歐陽文忠公宿探石闍鬼聲』		『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×
⑩	『改祭修齋決疑頌并序』	遵式 (九六〇—一〇三三)	『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×
⑪	『施食須知』	仁岳 (九二二—一〇六四)	『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×
⑫	『施餓鬼食文』	蘓軾 (一〇三六—一一〇一)	『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×
⑬	『水陸法像贊并序』	蘓軾 (一〇三六—一一〇一)	『統藏経』一〇一冊 『施食通覽』所収	×

× (道場法として、上堂八位・外堂八位の十六の衆に対する贊(四字八句)を記載。外堂八位に「餓鬼道衆」が含まれる)

25	『仏印禪師加持水陸感驗』 『呪破地獄傷感驗』	仏印禪師 (?—一〇九八)	『続藏経』一〇一冊 (『施食通覽』所収)	× (重坡大云云として破地獄傷(若人欲了知)を記載)
26	『呪破地獄傷感驗』		『続藏経』一〇一冊 (『施食通覽』所収)	
27	『呪破地獄呪感驗』		『続藏経』一〇一冊 (『施食通覽』所収)	×
28	『施食通覽』(一一〇四序) (宗曉の記述は『施食通覽序』のみ)	石芝宗曉	『続藏経』一〇一冊	×
29	『施食心法』(『釋氏施食心法』とも)	鄭思肖(二四—一一一八)		失伝のため不明
30	『施食文』	如居士 (?—一一二二)	京都大学図書館蔵 『如々居士語録』所収	【差違】 婦依三寶↓縁起衆↓破地獄傷↓破地獄開晒囉陀羅尼↓麥食陀羅尼↓一字王心水輪灌甘露乳海陀羅尼↓發菩提心陀羅尼↓阿弥陀淨土呪↓七如来名号↓三婦依↓生飯偈↓授菩薩三摩耶戒陀羅尼↓四弘誓願↓普回向 (施餓鬼と異なる行法であり、長文のため略)
31	『法界聖凡水陸勝會集善儀軌』	志警(南宋撰 雲棲株宏(明)重訂)	『続藏経』一一九冊	【差違】 大悲呪↓啓白文↓奉誦三寶↓焰口陀羅尼↓淨食加持偈↓施甘露水陀羅尼↓五如来↓破地獄傷↓六道↓懺悔↓婦依三寶↓受戒↓四弘誓願↓發菩提心↓心経↓生飯偈↓普回向
32	『幻住庵清規』附録「開甘露門」 一三二七(延祐四年)	中峰明本(二六三—一三三三)	『続藏経』一一一冊	

次に施餓鬼法の式次第について目を向けてみたい。『分解』の施餓鬼法は、

大悲呪↓破地獄傷↓婦依三寶↓縁起衆↓焰口陀羅尼↓施甘露水陀羅尼↓施乳海陀羅尼↓七如来名号↓往生呪↓淨食

加持偈↓生飯偈↓八句回向↓普回向↓略三寶

という構成となっている。一方、『施餓鬼鈔』の式次第は、

破地獄傷↓婦依三寶↓縁起衆↓一切徳光無量威焰陀羅尼↓甘露水陀羅尼↓乳海陀羅尼↓七如来名号↓往生呪↓淨食

加持偈↓生飯偈↓八句回向↓普回向↓略三寶

となっており、両書に記す施餓鬼法は陀羅尼の呼称が異なるものの、破地獄傷・七如来名号・往生呪・生飯偈を含むほとんど共通した式次第であることが分かる。とすれば、七如来・往生呪を含む施餓鬼法は『分解』や『施餓鬼鈔』が出版された十七世紀後半において禅宗の標準的な行法であったのではないだろうか。

この行法は、尾崎正善が指摘するように、永和二年(一三七六)に書写された『瑩山清規』(禅林寺本)の施餓鬼法

（加筆含む）とほぼ同様の形態であり、『正法清規』や『廣澤山普濟寺日用清規』『萬松山清規乾』などの曹洞宗の清規にも確認できる。⁽²¹⁾

施餓鬼はたびたびその式次第が改変されて一定していないとはいえ、中世から近世の諸清規に散見するこの七如来・往生呪を含む施餓鬼法の起源を考える上で、本稿末に付した南宋の如々居士（？—一二二二）の「施食文」は特に重要な典籍である。如々居士の「施食文」の式次第を簡潔に記せば、次のようなものとなる。

帰依三宝↓縁起衆↓破地獄偈↓破地獄開咽喉陀羅尼↓変食陀羅尼↓一字王心水輪灌施甘露乳海陀羅尼↓發菩提心陀羅尼↓阿弥陀淨土呪↓七如来名号↓三帰依↓生飯偈↓授菩薩三摩耶戒陀羅尼↓四弘誓願↓普回向

上述のように、如々居士の「施食文」には、帰依三宝や縁起衆、破地獄偈と三陀羅尼、阿弥陀淨土呪（往生呪）、生飯偈という行法が含まれており、『分解』『施餓鬼鈔』のそれと共通している。そのため、七如来・往生呪を含む施餓鬼法は、如々居士の「施食文」などを主とした南宋の様式を採り入れたものと解される。『分解』の七如来の行法に関する記述の中で、「如々居士の『施食文』には七如来有り」とあるのは、それを端的に示すものである⁽²²⁾。

『施餓鬼鈔』にも記載された七如来の施餓鬼法が近世禪宗において広く普及していったことは、月舟宗胡刊の『瑩山清規』や、無着道忠撰の『小叢林略清規』からうかがえる。月舟宗胡によって延宝五年（一六七七）に開板された『瑩山清規』において、七如来の施餓鬼法は五如来名号を含む行法とは別に、「開甘露門」という名称で巻末に付載されている。また貞享元年（一六八四）に無着道忠が小規模な禪林の行法を定めて刊行した『小叢林略清規』の「檀家薦亡施食法」では、

大如二月分七月記。但可下方丈内中几安亡者牌。陳_二炬華燭_一。施食滿散_中誦大悲呪_上。

水陸會
回向卷

『大正新脩大藏經』八一巻、七〇六頁上段）

とあり、七月の「晚間盂蘭盆会」には「_一挙_二大悲呪_一…次_三挙_三施食呪偈_一」<sup>若人十方
七如来</sup>とあるので、小規模な菩提寺での施餓鬼が破地獄偈・七如来名号を含む行法であったことが知られる。

こうした七如来の行法に真言僧からの批判がよせられたことについては、尾崎正善が指摘するところである。淨嚴の『諸儀軌訣影』（一六九四成立）では、「禪家ニハ多宝如来即チ宝勝如来ナルコトヲ不知シテ、多宝ノ外ニ又宝勝ヲ加フ。是レ愚也」と如来名号における多宝如来と宝勝如来との重複が批判の対象となっている⁽²³⁾。こうした批判に呼応する形で、

曹洞宗では面山瑞方が「甘露門」という新たな施餓鬼法を制定するに至る。面山は不空訳『施諸餓鬼飲食及水法并手印』を基調として『施餓鬼作法』という書名で「甘露門」を撰述し、享保一二年（一七二七）に刊行している。近代以降ににおいても面山の甘露門は刊行され、明治一六年（一八八三）に其中堂より『甘露門』として、明治二四年（一八九一）に森江書店より、『施餓鬼作法在案釋儀法門』として刊行されている。また明治二二年（一八八九）に発布された近代における曹洞宗の公的な行法書『洞上行持軌範』において施餓鬼法は面山の甘露門に依拠したものとなった。

現在ではこの面山の甘露門が曹洞宗の標準的な行法となっているのに対し、『施餓鬼鈔』などにあつた七如来・往生呪を含む施餓鬼法はというと、先述した其中堂刊『甘露門』に「若人欲了知」という題で掲載された。戦後でいえば、大本山永平寺『曹洞宗日課経大全』といった経本に「大施餓鬼」という題で掲載されている。²⁴つまり、面山の施餓鬼法が公的な行法として営まれる一方、洞済共通の「若人欲了知」に始まる施餓鬼法は地域的な行法となり、二つの施餓鬼法が併存する状況となつている。

四 『懺法因起』と『円通懺儀鈔』

次に懺法に関する典籍、『懺法因起』に着目してみたい。²⁵『懺法因起』は書名にあるように、「懺法」の「因縁（縁起）」を語るもので、寛永一五年（一六三八）に刊行された懺法の行法書である。内容は、唐の悟達国師知玄（八〇九—八八一）が懺法によって人面瘡を平癒したという靈驗譚に始まり、日本への伝来を東福寺の聖一国師が入唐の際に金山寺にて拝見したことなどから説くものである。巻末には、「懺法之起」として梁の武帝による后妃救済譚を「或記二」という形で記載している。「蓋シ三昧ノ水ヲ取テ多生之あやまち 愆ヲ洗フ、或ハ水懺ト曰、三点ノ水ヲ曰クナリ」とあるように、滅罪のために加持した水を用いて懺摩の儀礼を行うため、懺法は「水懺」という呼称もあり、現在でも台湾において水懺は盛んに営まれる仏教儀礼となつている。²⁶ちなみに、この慈悲水懺は、煩惱障、業障、報障に従つて十仏と六菩薩の聖号を唱礼して懺悔し、水を加持する儀礼である。²⁷

この『懺法因起』には、懺法の由来に関する二つの物語が記載されている。その一つは悟達国師知玄の人面瘡平癒譚であり、大要は次のようなものである。唐代懿宗いどうの時代に、悟達国師知玄の膝に人面瘡ができた。人面瘡は知玄が前世で殺した鬼錯であり、報復のために出現したと語る。この人面瘡を泉の水で洗うとあまりの痛みに気絶するが、気がつ

くと人面瘡は平癒した。知玄はこの地に堂を建てて、自身で懺摩したことに懺法は由来するという。⁽²⁸⁾これは『慈悲水懺法』（『大正蔵』四五卷・一九一〇番）に依拠した由縁の語りとなっている。

一方、梁の武帝による后妃救済譚はというと、梁の武帝の後妃は嫉妬の多く死して巨大な蟒蛇となったものがおり、后宮へ入って、夢に出て帝に救いを求めた。梁の武帝は僧を請来して礼仏し、観音菩薩に懺摩の法を修すると、忽ちその後妃は天人となり、空中で帝の功德に感謝したという。

こうした由来の語りは、『慈悲道場懺法』（『大正蔵』四五卷・一九〇九番）に依拠したものであるが、観音懺法の典拠となつている遵式『請觀世音菩薩消伏毒害陀羅尼三昧儀』（『大正蔵』四六卷・一九四九番）にはみえないものである。

この点を念頭に置きながら、万治三年（二六六〇）に刊行された『円通懺儀鈔』^{えんつうせんぎしやう}についてみていきたい。⁽²⁹⁾本書の改刻本には、『懺法之起』（寛文三年刊・村上平楽寺）、『観音懺法註并起』（寛文三年刊・小川多左衛門、寛政四年再刊・小川多左衛門）があるため、懺法の行法書の中でも、本書は版を重ねてひろく流布した行法書と位置づけられる。本書の由来に関する記述は、「懺法之起」として梁の武帝による后妃救済譚をあげた後、唐の悟達国師の人面瘡平癒、天台宗の遵式が法式を定めたこと、建仁寺の栄西・筑前崇福寺の湛恵・東福寺の聖一国師（円爾弁円）によって宋国より伝来したことを語る。次に莊嚴法や随喜する行者たちの行状への戒め、行法の説明の順に展開される構成になっている。

観音懺法の起源として唐の悟達国師の人面瘡平癒譚の縁起と聖一国師による請来を記述していることは、『懺法因起』と共通している。ただし『円通懺儀鈔』では、「原ルニ夫レ圓通懺摩ト云ハ蕭梁武ノ帝嘗テ此ノ法ヲ修メ后宮巨蟒之身ヲ救フ蓋シ是權興ナルカ」（一丁表）という見出しから、『懺法因起』の末尾にあつた武帝の後妃救済譚を巻頭に移し、最も古い由来として語っている点に相違がみられる。

このことは、達磨大師との交流のある梁の武帝に観音懺法の起源を求めることで、懺法を祖師より受け継がれてきた「伝統」をもつ禪宗の行法という性格を付与しているように思われる。しかもそれは、水陸会に端を発する施餓鬼会の縁起に、懺法のそれを合わせる形となっているのである。

五 まとめ

以上、施餓鬼や懺法に関する行法書の出版状況やその内容についてみてきた。『分解』『施餓鬼鈔』に記載されていた

七如来・往生呪を含む行法が如々居士の「施食文」を主とした南宋の行法を採り入れたものであるとの見解を『如々居士語録』の資料紹介を通じて行った。如々居士の「施食文」の陀羅尼や偈文等を施餓鬼法全体の変遷に位置づけるといった検討が不十分であるが、その点については稿を改めて論じたい。

本稿では、近世において施餓鬼や観音懺法といった単独の法会の行法書が数多く出版される状況を確認した。行法書の記述に従えば、施餓鬼や観音懺法はいずれも梁の武帝に始まる禅宗古来からの儀礼と言える。このような共通性をもつ施餓鬼と観音懺法の二つをセットにして考えるのはなにも筆者だけではない。

本稿で取り上げた『施餓鬼鈔』と『懺法之起』の二書は表1に示したように、村上平楽寺という同じ版元から寛文三年（一六六三）の三月に同時に刊行されている。一方、近世曹洞宗の学匠として知られる面山瑞方は『施餓鬼作法』に加えて、宝暦五年（一七五五）に『観音懺摩法』一冊を校訂し、林伝左衛門（京都）より刊行している。³⁰近世に刊行された行法書、あるいは清規を見渡した時、観音懺法と施餓鬼とを車の両輪の如く一組のものとして扱う姿勢がみられる。

施餓鬼は食を無数の餓鬼に渡るように増やす加持飲食陀羅尼と、水を甘露とする甘露真言、そして餓鬼を救う如来の名を唱える如来名号からなる儀礼であり、こうした餓鬼という浮かばれない他者を救済した功德を身近な故人へと回向する供養法である。それに対し、観音懺法は死者の罪業を観音菩薩に懺悔し滅することで救済する死者個人のみを対象とする供養法である。施餓鬼会は「無遮大会」という別名にあるように「広い」死者たちを射程におさめているのに対し、観音懺法は死者個人の罪業という人生の「深さ」に焦点を合わせた供養法である。中世より様々な供養儀礼が禅宗によって展開されていくが、施餓鬼と懺法の行法書が近世において数多く出版されている状況は「供養の広さ」を武器とする施餓鬼法と、「供養の深さ」を武器とする懺法のいずれもが、「禅家の吊い」として重要視され、近世社会において必要とされた証ではないだろうか。

注

- (1) 池上良正「無縁供養の動態性」『宗教研究』第八六卷第二号（二〇一三）、同「宗教学の研究課題としての「施餓鬼」』駒澤大学 文化』第三二号（二〇一四）。
- (2) 引野享輔「近世日本の書物知と仏教諸宗」『史学研究』第二四四号（二〇〇四）。

- (3) なお曹洞宗では現在、差別是正の観点から「施餓鬼」という呼称ではなく、食を施すと書いて「施食」という名称を用いているが、本稿では史料に「施餓鬼」の語が多いため、それに基づき「施餓鬼」という表現を用いた。
- (4) 近世における施餓鬼については、尾崎正善「施餓鬼会に関する一考察（1）」——宗門施餓鬼会の変遷過程」『曹洞宗宗学研究所紀要』第八号（一九九四）、同「施餓鬼会に関する一考察（2）」——真言宗との比較を通して」『印度学仏教学研究』第四三卷第一号（一九九四）、同「施餓鬼会に関する一考察（3）」——諸仏光明真言灌頂陀羅尼と大宝楼閣善住秘密根本陀羅尼について」『曹洞宗研究員研究紀要』第二六号（一九九五）を参照。
- (5) 「無縁」の語を含む葬送儀礼の手引き書については、浅野久枝「無縁」の名をもつ書物たち——近世葬式手引書紹介——」『仏教民俗研究』第七号（一九九二）、清原泰裕「無縁」の語を冠する「葬式手引書」をめぐる、平成二七年度駒沢宗教学研究会修士論文発表会発表資料（二〇一五）を参照した。
- (6) 『統真言宗全書 第四二巻——解題』（統真言宗全書刊行会、一九八八）一頁。
- (7) 浄敵による禪宗の施餓鬼法への批判については、尾崎正善「施餓鬼会に関する一考察（2）」——真言宗との比較を通して」『印度学仏教学研究』第四三卷第一号（一九九四）に詳しい。
- (8) 『統真言宗全書 第一巻』（統真言宗全書刊行会、一九七六）一一一頁上段。
- (9) 山中玲子「二〇朝長」『懺法二』『中世文学研究叢書 6 能の演出——その形成と変容』（若草書房、一九九八）二四四頁。
- (10) 法政大学能楽研究所編「観世新九郎家文庫目録（上）」『能楽研究』第二号（一九七六）一三五頁。
- (11) 『因果物語』には、万治元年頃に浅井了意によって手が加えられた平仮名本と、寛文元年に刊行された片仮名本の大きく二種がある。
- (12) 堤邦彦『近世仏教説話の研究——唱導と文芸』（翰林書房、一九九六）は『因果物語』をはじめ近世仏教説話や怪異小説を唱導と文芸という観点から考察している。
- (13) 拙稿「片仮名本『因果物語』にみる近世禅僧の供養儀礼——施餓鬼と観音懺法を中心に」『駒澤大學 佛教文學研究』第一八号（二〇一五）。
- (14) 「副寺寮日鑑」『統曹洞宗全書——第二巻 清規・講式』（曹洞宗全書刊行会、一九七六）。

(15) 拙稿「近世曹洞宗における追善供養の具体相——大乘寺『副寺寮日鑑』を中心に」『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第四二号（二〇〇九）。

(16) 本書を註釈した写本二点が駒澤大学図書館にあり、その影響がうかがえる。

(17) 禅文化研究所編集部編『江湖叢書 大施餓鬼集類分解』（禅文化研究所、一九九五）はしがき一頁。

(18) 如々居士については椎名宏雄と永井政之によって研究がなされている。椎名宏雄の「宋元版禅籍研究——如々居士語録・三教大全語録』『印度学仏教学研究』第二九卷二号（一九八一）は如々居士の語録である『如々居士語録』『如々居士三教大全語録』に関する書誌学的な研究であり、『如々居士語録』が京都大学所蔵の古写本であることが知られる。一方、永井政之「南宋における一居士の精神生活——如々居士顔丙の場合（一）」『駒澤大学佛教学部論集』第一五号（一九八四）では、如々居士の行状とともに、『如々居士語録』の各巻目録が記されており、その大綱を知ることができる。また永井政之「南宋における一居士の精神生活——如々居士顔丙の場合（二）」『駒澤大学佛教学部論集』第一六号（一九八五）では如々居士のもつ、職種に応じた方便修行のあり方が検討されている。

(19) 『施餓鬼鈔』については駒澤大学図書館所蔵本（請求記号 H293/21）を用いた。

(20) 日本において、宝勝・離怖畏・広博身・甘露王・妙色身・多宝・阿弥陀からなる七如来名号の古い例は管見の限り、靜然撰『行林抄』である（次當爲稱諸佛如来吉祥名號。：無寶勝如来 南無離怖畏如来 南無廣博身如来 南無甘露王如来 南無妙色身如来 南無多寶如来 南無阿彌陀如来）『大正藏』七六卷・二四〇九番四九六頁中段）。

(21) 尾崎正善「翻刻・禅林寺本『瑩山清規』（禅林寺本）』『曹洞宗宗学研究紀要』第七号（一九九四）四一—四三頁。

(22) 禅文化研究所編集部編『江湖叢書 大施餓鬼集類分解』（禅文化研究所、一九九五）六三頁。

(23) 『続真言宗全書 第一巻』（続真言宗全書刊行会、一九七六）一一一頁。

(24) 大本山永平寺編『曹洞宗日課経大全』（大紀折本工藝社）。

(25) 『懺法因起』については駒澤大学図書館所蔵本（請求記号 H292/16）を用いた。

(26) 黄美「台湾の水懺信仰について」『印度学仏教学研究』第三八卷第二号（一九九〇）。

- (27) 十仏は①毘盧遮那仏・②釈迦牟尼仏・③阿弥陀仏・④弥勒仏・⑤龍種上尊王仏・⑥龍自在王仏・⑦宝勝仏・⑧覺華定自在仏・⑨袈裟幢仏・⑩獅子吼仏で、六菩薩は①文殊師利菩薩・②普賢菩薩・③勢至菩薩・④地藏菩薩・⑤大莊嚴菩薩・⑥觀自在菩薩である。

- (28) 『慈悲水懺法』の構成と『仏名経』との関係については、坂本道生『慈悲水懺法』と『仏名経』『印度哲学仏教学』第二二号（二〇〇七）、同『慈悲の儀礼——『慈悲水懺法』について（慈悲）』『日本仏教学会年報』第七二号（二〇〇六）に詳しい。

- (29) 『円通懺儀鈔』については駒澤大学図書館蔵本（請求記号 H293/44）を用いた。

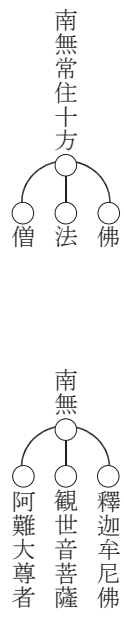
- (30) 近世に撰述された観音懺法の講本の系譜については、川口高風『観音懺法』刊行史上における白鳥鼎三本の特徵『禅研究所紀要』第一〇号（一九八一）に詳しい。

〈巻末資料〉 『如々居士居士語録』乙巻所収の「施食文」

底本には、京都大学図書巻所蔵の『如々居士居士語録』乙巻所収の「施食文」を使用した。

○施食門

施食甫^文



仰啓阿難大教主、
破獄開喉變甘露、
願此淨食遍十方、
一切鬼神委降赴、

南無歩哩 迦哩多哩 怛哆嚩多耶三遍

若人欲了知 三世一切佛 應觀法界性 一切唯心造

方子^ノ等、合道場人、稽首和尚、一心奉請、盡十方法界、遍滿虛

空、一切無邊、鬼神等衆、訶利帝母、焦面鬼王、婆羅門仙、河沙餓鬼、三途八難、受苦衆生、水府山林、人間陰界、非命惡死、無主孤魂、願乘佛力、同降道場、是夜今時、領沾供養、

又慮、汝等人夫人身、常沉苦趣、乍聞^召請、難便降臨、再爲汝等加^二持破地獄開嚙喉陀羅尼^一曰

唵 步布帝哩 迦多哩 恒多壁多耶^{三遍}

已衆咒力、悉降道場、我佛教藏中、有變食陀羅尼、能化少成多、變無爲有、普使現前、悉皆充足、即說呪曰

南無薩婆 恒多壁多 阿嚙路枳帝 唵 摩羅 摩羅三

摩羅三 摩羅 吽吽^{三遍}

諸佛子、上來、爲汝加持變色^食眞言已竟、又慮、汝等、從業道中末、遇

此飲食、纔入口腹、變成湯炭、變成膿血、今再爲汝等、加持施香水

乳海陀羅尼、變此飲食、皆成法喜禪院之食、能令汝來咽喉寬大

所得法食、永劫無飢變熱惱作清涼、脱^(病力)途成正覺、即說呪曰

南無壁嚙婆曳 恒哆壁多耶 恒姪他 唵 模嚙模嚙

跋囉模嚙 跋囉模嚙 娑訶^{三遍}

向下更有^二一字王、心水輪灌施甘露乳海陀羅尼、能令汝等所得

飲食如醍醐灌頂以甘露洒心、所有罪障業障、報障無不消除、善

因果因福、因悉皆增長、

南無三滿多 没^(疾力)駄喃 嚙吽^{三遍}

上來、咒食功德圓成、欲助往生、須憑秘咒、**諷**彌陀淨土咒^{三遍}

昔有十千魚、得聞流水長者子、稱寶寶勝如來名號、并十二因緣法、

悉得生天化爲十千天子、快樂無量、今爲汝稱七寶如來并十二

因縁各々和南志心諦聴、志志聴受

唱南無多寶如來、南無寶勝如來、南無妙色身如來、

南無廣博身如來、南無離怖畏如來、南無甘露王如來、

南無阿彌陀如來、已上各三遍

無明縁行、行縁識、々縁名色、々々縁六入、々々縁觸、々縁受、々

縁愛、々縁取、々縁有、々縁生、々縁老憂悲苦惱

昔有一餓鬼、遇善知識諸大菩薩、爲稱南無佛、乘佛恩力、尋即命

終、生四処天、發菩提心、今爲汝等、稱三寶名號、志心諦聴、志心受聴

唱南無佛陀耶、南無達磨耶、南無僧伽耶、三遍

唱歸依無上尊、歸依法離欲尊、歸依僧衆中尊、三遍

唱歸依佛竟、歸依法竟、歸依僧竟、三遍

唱南無毗盧那佛、南無盧舍那佛、南釋迦牟尼佛遍三

唱願汝從今夜、乃至無上菩提、誓願將此身心、与〇



汝等鬼神衆、戒今施汝供、此食遍十方、一切鬼神共、供

唱歸依佛法僧三寶、三寶慈悲求懺悔、無量劫來罪障消滅

超生往生大菩薩、願生九品見彌陀、龍華會上願相逢

同證無上佛菩提、一超直入如來地、大方廣佛華嚴經

十方諸佛諸菩薩、摩訶般若波羅蜜

某等、誓得道後、普度有情、憐愍汝等、久沉苦海、不逢佛法、難得出期、今憑三寶加持、今汝悉得解脫、諸佛子、願汝從今已出改往修

來、息貪瞋癡、行戒定慧離愛欲網、拔煩惱根倒人我山、出生死海
修十善業證三摩提、辭後有身、了向上着、脫三途苦、出六道輪悟
法王身、行菩薩道、誓相度脫、無復昏迷、今再為汝受三昧耶戒發
四弘誓願、三世如來因此成就、堅汝進心、早起宥海

咒曰

唵 三昧耶 薩怛梵

唱 煩惱無邊誓願斷、 衆生無邊誓願度、

法門無邊誓願學、 佛道無邊誓願成、

願以此功德普及於一切、我等與衆生、皆共成佛道、

我佛有奉送陀羅尼、善保雲程、伏惟珍重

唵 摩惹羅 幕揚夜叉穆^{香花送} ○語錄乙集二卷終